上三川 激動の中世⑪

上三川城・多功城の最後

豊臣秀吉が朝鮮出兵を行なっていた1596年、上三川城と多功城の運命を大きく左右する後継者争いが、宇都宮家に起こります。

このころ、朝鮮出兵から大坂に戻った宇都宮家当主の国綱は30歳でしたが、まだ跡継ぎがいませんでした。このことから秀吉は、自分の重臣である浅野長政の子どもを養子とし、跡継ぎにするよう国綱に伝えました。国綱は、大坂にいた家臣の上三川城主今泉高光と北条松庵に相談すると、「太閤様の命令を断るわけにはいかない」との意見であったため、秀吉の命令を受け入れることにしました。

しかし、これに激怒した人物が宇都宮家の家中にいました。それは、国綱の弟で真岡城主の芳賀高武でした。「家中に一族が多くいるにもかかわらず、他家より養子を迎え入れるとは何事だ」と激怒した高武は、北条松庵を京都の四条河原で殺してしまいました。これに驚いた今泉高光は、自分の身の危険を察知し、大坂より上三川城へ急いで戻りましたが、高武は高光を追い、1597年5月2日の夜に真岡城より兵を率いて上三川城に進み、四方より火矢を放ちました。夜半における不意打ちであったため、上三川城は混乱し、やがて高光以下家臣たちは、城内の北側にある長泉寺にて自害しました。

この事件は、家臣同士の争いごとで終わるものではありませんでした。時の権力者の豊臣秀吉の命令を断ったばかりか、領内において争乱を起こしてしまったことは、宇都宮氏を罰する十分な理由を与える結果となりました。そして、上三川城炎上の日より7か月後の12月13日に国綱は改易を命ぜられ、400年以上に渡る名家宇都宮家の支配が終わりを告げました。

既に上三川城は、芳賀高武との戦いにより没落していましたが、残っていた多功城は廃城となり城主多功氏は没落しました。ここに宇都宮氏南方の守りとして350年に渡り活躍した上三川城・多功城の歴史はあえなく終わりを迎えました。

長泉寺にある樹齢500年のコウヤマキは上三川城の悲劇を見たことでしょう

広報短歌

退屈な会話に相づちうちながら
　重くたれくる雲を見つめる　田島雪子

注連縄の造り手老ひしこの秋の
　鎮守の鳥居苔のむすまま　稲葉敬子

落葉に降りつぐ時雨遠き日の
　母の呟きふともかへしぬ　沢谷郁子

菊日和命日参りの昼下り
　冬枯れ墓地に一羽の鳥　小島キミ

吾が庭の小花手折りて押し花の
　しおり作りし友逝きましぬ　高橋ツギ子

蟻一つ紅葉落葉をゆききする
　この陽だまりも間なく陰るに　斎藤アツ子

幾重なる山迫りくる奥土呂部（どろぶ）
　雨はしとどに人影もなし　高田幸子

大き樹の梢離れて落つる葉も
　吾が身重なる今日の夕暮　武藤ひさ

玄関に並びて匂いるシクラメン
　赤とピンクと師走を和（なご）む　井沢和江

捨猫の追はれながらも軒下を
　終の棲家と半眼で寝る　菊地美代